



# 複式簿記の損益計算機能に関する一考察 : 16-18世紀の英国会計における冒険取引勘定の役割について

中野, 常男

---

(Citation)

研究年報. 経営學・會計學・商學, 28:1-31

(Issue Date)

1982

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81004117>



# 複式簿記の損益計算機能に関する一考察

—— 16—18世紀の英国会計における

冒険取引勘定の役割について——

中 野 常 男

## I

企業会計の基本的計算形式たる複式簿記においては、貸借左右対照的な形式をもつ実在・名目諸勘定の統合の上に構築された自己完結的な体系的勘定組織がその中核を構成し、各取引はこの体系的勘定組織に貸借複記入されることになる。このような本質的特徴を備えた、一つの体系的技術としての複式簿記が、それ以前の体系化されていない不完全な会計記録の技術から、どのように生成・発展してきたのかという問題については、従来から複式簿記発生史の研究という形で多くの研究者が関心を示してきた。複式簿記の起源に関する代表的見解は、地中海商業の復活によって著しい繁栄を示した中世末期イタリアの経済社会にその起源を見出そうとするイタリア起源説であり、この説は、さらに、ジェノヴァ起源説、ロンバルディア起源説、トスカナ起源説に分けることができる。これに対して、少数説ではあるが、古代ローマの世界に複式簿記の起源を求めようとするローマ起源説なども展開されており、複式簿記誕生の時期と場所に関しては、史料の制約条件等もあって、明確に一致した見解を見出すことは困難である。<sup>(1)</sup>しかしながら、遅くとも13世紀後半から14世紀前半にかけての時期に、地中海貿易によって繁栄したイタリア商人の間で、彼らの取引活

(1) Cf. 小島, [55], 4—41頁; 泉谷, [49], 25—39頁。

動を記録・計算するための体系的技術として、複式簿記が利用されていたということは明らかなようである。<sup>(2)</sup>

Basil S. Yamey は、上述した如く、その起源に関して必ずしも明確に一致した見解は見出されないものの、地中海商業の復活を背景に、ジェノヴァ、フィレンツェ、ヴェネツィアといったイタリアにおける商業中心地への漸次的普及をみた複式簿記が有する主要な特長を、それ以前の会計記録技術と比較する形で、次の三点に要約している。すなわち、(1)記録が包括的で秩序だっていること、(2)記帳の二重性に基づく自己検証能力を備えていること、(3)企業の損益および財政状態に関する報告書を誘導しうる資料を包含しているということの三点である。<sup>(3)</sup>問題は、これらの特長のうちのいずれが主として評価され、複式簿記がそれ以前の会計記録技術に代わって利用されるようになっていったのかということである。今日、複式簿記が企業会計の基本的計算形式として利用されるにあたり、上述した三つの特長の中で最も評価されているのは、言うまでもなく第三の特長、つまり、企業の損益や財政状態に関する情報を、実地棚卸に全面的に依拠することなく、原則として元帳に蓄積された記録から直接的に取り出すことができるという側面であるが、しかし、この特長が、今日と異なる経済環境の下にあった産業革命以前の英国会計でも、今日と同様な形で評価されていたと類推することは必ずしも妥当ではない。以下、本稿においては、複式簿記がそれ以前の会計記録技術に比較して有すると考察される三つの主要な特長、なかんずく第三の特長に包摂されている損益計算機能の側面に焦点をあてつつ、16世紀から18世紀前半における英国の会計実務の中で、複式簿記がどのように評価され、また、利用されていたのかという問題について若干の検討を加えてみようと思う。

(2) de Roover, [10], p. 139; Yamey, [42], p. 1; Winjum, [39], p. 39; cf. Chatfield, [1], p. 32.

(3) Yamey, [42], p. 7.

## II

複式簿記を解説した世界最初の印刷文献は、周知の如く、Luca Pacioli の簿記論である。これは、彼が1494年にヴェネツィアで公刊した数学書 *Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita* の中に含まれており、Paciolo は、この書物の第1部第9篇論説第11 Particularis de Computis et Scripturis において、複式簿記を36章にわたって説述している。<sup>(4)</sup>しかしながら、この Paciolo 簿記論と今日の複式簿記解説書とを比較するとき、我々はそこに大きな相違があることに気付くであろう。すなわち、Paciolo 簿記論にあっては、あくまでも基本的構造において一応の確立をみたにすぎない段階での複式簿記、とりわけ、未熟な交通技術や自然的危険等を背景に成立した、異なった価格組織をもつ分散した市場圏間の仲立ち商業の上に富を蓄積していった海港都市ヴェネツィアで用いられた商的複式簿記が説かれていたのであり、例えば、そこに見出される損益計算は、今日の企業会計にみられるような期間計算の形態ではなく、口別計算 (Partiierrechnung) の形態を採っていた。

- (4) *Summa* の著者名の表記方法に関してはさまざまな説が見受けられる。Federigo Melis および泉谷勝美両教授の説によれば、姓と名の双方を表記するときには Luca Pacioli、つまり、複数形の Pacioli が用いられ、他方、姓のみで表記するときには単数形の Paciolo が用いられるとされる。しかも、このような表記方法は、泉谷教授によれば、中世の会計帳簿において商人や使用人の姓名を記す際に随所で用いられていたといわれ、本稿では、これら二人の教授の説に従って、“Luca Pacioli” (ただし姓のみの場合には “Paciolo”) と表記しておくことにする (泉谷、[49], 1頁脚注(1); cf. 小島、[57], 序3頁)。
- (5) Paciolo は、おそらく、簿記論の中に散見される彼の文言から推測するかぎり、ヴェネツィア以外の他の商業都市、例えば、フィレンツェやミラノで用いられていた簿記法に関する知識を多分に有していたように思われる。しかしながら、彼は、その中でも、ヴェネツィア式簿記こそが、他のいかなる方法よりも確実に推奨されるべきものであると考察して、この方法に従った複式簿記を *Summa* の一部を割いて解説したのである (小島、[55], 236—237頁; cf. Geijsbeek, [11], pp. 33, 45, 51, 69; Penndorf, [30], S. 89, 107, 113, 139)。

複式簿記誕生期の原初的な損益計算制度たる口別損益計算制度の下にあっては、定期決算と結びついた形での元帳の規則的な締切はみられず、元帳の締切手続は、例えば、記入余白がなくなったときに必要とされる帳簿の更新、あるいは、商人の死亡や廃業、組合企業からの構成員の脱退や分離といった際に、主として簿記処理上の見地から、特定の期間的制約を受けることなく、不規則的に実施されていたにすぎない<sup>(6)</sup>。しかしながら、定期決算制度と結びついた形での元帳の規則的な締切に基づく、企業全体としての期間損益の限定計算が行われていなかったとしても、このことが、直ちに、当時の商人達が元帳記録からの損益の把握に無関心であったということを意味するわけではない。異質的市場圏間の仲立ち商業を機軸に繁栄していたヴェネツィアで用いられた複式簿

(6) 期間損益計算制度を採っている今日の企業会計においては、決算は、英語で closing the booksと表現されるように、規則的な間隔をあけての帳簿の締切、特に元帳の締切を中心として行われる。すなわち、各会計期間末の決算日に、元帳に記載された勘定記録に一定の計算整理が加えられた後、損益に関する名目諸勘定の残高は(集合)損益勘定に、資産・負債に関する実在諸勘定の残高は(閉鎖)残高勘定にそれぞれ振り替えられて締め切られる。損益勘定の残高は資本金勘定に振り替えられ、資本金勘定の残高が最終的に残高勘定に振り替えられれば、記録・計算に誤謬がないかぎり、元帳全体は貸借平均し、締め切られることになる(大陸式決算法)。そして、決算の結果を表すものとして、損益計算書と貸借対照表という決算諸表が作成される。これら二つの財務諸表は、企業の損益と財政状態を知るうえできわめて重要なものであるが、しかし、それらは、簿記技術的な見地からみれば、決算手続の結果として得られる二つの集合勘定、つまり、損益勘定と残高勘定の表示にすぎず、決算の中心はあくまでも元帳の締切手続に存するものと考えられる。しかしながら、このような決算と元帳締切との結合関係は、複式簿記が会計実務の中で利用されるようになった初期の段階から必然的な関連性をもって存在したとは言い難い。すなわち、決算があくまでも期間損益計算制度に立脚する概念であるのに対して、元帳の締切は、歴史的にみれば、期間損益計算制度に先行する原初的な口別損益計算制度の下においても、例えば、本文中で記述したように、帳簿の更新や商人の死亡といった際に、不規則的な形ではあるが行われており、それゆえに、元帳の締切は必ずしも期間損益計算制度と直接的に結びつく概念ではなかった。したがって、複式簿記会計の初期の段階にあっては、たとえ元帳に締切手続が施されていたとしても、直ちに、そこにおいて決算、さらに、それに基づく期間損益の限定計算が行われていたと結論することはできないのである。

なお、決算と元帳締切に関連した問題の詳細については、小島、[51]、44—58頁を参照されたい。

記の中心的勘定を形成したのは、商的企業の根本的利益源泉たる商品の売買を記録・計算する商品勘定である。Paciolo 簿記論に示されるように、当時のヴェネツィア式簿記の勘定組織においては、商人の営む取引活動が基本的には断続的で当座的な性格を有する冒険取引 (venture) の集合から成り立っていたことを反映してか、異なった種類の商品すべてを一つの勘定で総括的に処理するという一般商品勘定、あるいは、これを仕入勘定・売上勘定・繰越商品勘定といった職能別に分割した形態での商品勘定は見出されず、取扱商品の種類や仕入口別、あるいは、積送品については特定の仕向地に対する航海や旅商別といった、個々の商取引活動を単位とした複数の商品勘定、つまり、冒険取引勘定 (venture accounts) が設けられていた。当時の商人達は、このような一群の個別的商品勘定を基礎とした会計処理手続、すなわち、冒険取引会計 (venture accounting) の手続を利用することによって、商品の仕入や売上のみならず、手数料や関税などの費用もできるだけ特定の商取引に関連づけて把握し、期間とは無関係に、それぞれの商取引における商品のすべてが売却され、取引が最終的に完結した段階で、その都度、該当する商品勘定だけを締め切って、特定の商取引に帰属すべき損益、いわゆる口別損益を計算することができたのである。未完結の冒険取引<sup>(7)</sup>における商品の部分的販売から生じた損益に対する考慮は払われず、同一元帳内での他頁への勘定の繰越や元帳全体の更新に際しても、販売未了の商品勘定においては、その算術的な貸借差額が単純に新しい勘定や元帳に繰り越されていたにすぎない。したがって、冒険取引会

(7) ヴェネツィアにおける冒険取引会計の詳細については、Lane, [22], pp. 164—173; de Roover, [10], pp. 156—159; 泉谷, [48], 295—303頁等を参照されたい。

なお、冒険取引会計の手続は、複式簿記が十分に展開される以前においても冒険取引勘定が中世の商人によって利用されていたことから明らかなように、複式簿記から独立した形で運用することができる。しかしながら、冒険取引会計の手続によって、商人が自己の取引活動を包括的で秩序だてて捕捉することができるようになるのは、複式簿記の体系的勘定組織の上でそれが記録・計算されるようになってから以後のことであるように思われる (Winjum, [36], p. 753; [39], pp. 85—86)。

計の手続が適用される場合には、損益計算の構成的要素としての売残商品の認識——棚卸評価の問題は原則として生じないことになる。<sup>(8)</sup>そして、14世紀後半からの国内毛織物工業の急速な発展を背景に、それまでの国際商業における後発者としての地位からの脱却をはかり、18世紀前半にはその覇権を確立したといわれる英国に導入され、かつ、利用されるようになった複式簿記とは、James O. Winjum の主張に従うならば、まさに、上述したような元帳の不規則的な締切と冒険取引会計の手続を内包したヴェネツィア式の複式簿記であったとされるのである。<sup>(9)</sup>以下においては、この種の複式簿記が16—18世紀の英国会計の中でどのように利用されていたのか、特にその損益計算機能がどのように評価されていたのかという問題について、主として当時の英国商人の会計帳簿に含まれた冒険取引勘定の実際的作用を検討することにより考察してゆきたいと考えるが、しかし、これらの勘定の具体的な検討に入る前に、次の第Ⅲ節においては、ほぼ同じ時期の英国に現れたいくつかの代表的な複式簿記解説書にみられる商品勘定についての教示内容をまず概観しておきたいと思う。

(8) Lane, [22], p. 172; de Roover, [10], p. 117; 泉谷, [48], 302頁。

(9) Winjum, [36], p. 753; [39], p. 84; cf. Chatfield, [1], p. 58.

Frederic C. Lane は、ヴェネツィア式の複式簿記が、金融業や毛織物工業によって繁栄した内陸都市フィレンツェ、あるいは、ヴェネツィアと同様に地中海商業で繁栄したジェノヴァで用いられた複式簿記よりも大きな評判を獲得して、英国をはじめとするヨーロッパに普及していった要因として、次の三点を挙げている。すなわち、(i) ヴェネツィアの職業的簿記教師達が記帳技術を高度な水準にまで洗練したこと、(ii) Paciolo 簿記論を含む最初期の簿記解説書がヴェネツィアで出版されたこと、(iii) ヴェネツィア式簿記に組み込まれていた冒険取引会計は、海上商業に携わる商人を本来的な対象とするものであったが、しかし、それ自体は非常に弾力的な体系でもあったので、さまざまな状況に応用することができ、商人達に、債権や債務に関する明瞭で正確な記録の保持のみならず、規則的ではないが、容易で実際的な損益の算定をも可能ならしめたといふことの三点である (Lane, [22], p. 173)。

また、Michael Chatfield は、上述した Lane の主張を首肯する形でヴェネツィア式簿記の地理的な普及を記述する一方で、それが20世紀に至るまで正典としての権威を帯びていたとして、時系列の側面におけるヴェネツィア式簿記の普及と影響を指摘している (Chatfield, [1], pp. 37—38, 52)。

## Ⅲ

Paciolo 簿記論に代表されるような、基本的構造において一応の確立をみた複式簿記が、いつ、どのように英国に伝播してきたのかという問題については、先に述べた複式簿記の起源に関する問題と同様に、明確な解答は与えられていない。おそらくは、当時の英国に居留していたイタリア人をはじめとする外国商人との商取引、あるいは、スペインやネーデルラントといった海外に進出した英国商人による現地での商取引などを通じて、複式簿記に接する機会が英国人にもたらされ、このことが、英国への複式簿記の伝播に対する実際的な端緒を形成したものと考えられる。また、Hugh Oldcastle の簿記書 *Profitable Treatyce* が出現した1543年以降、英国でも簿記の解説書が次第に出版されるようになっていったことも、複式簿記知識の普及に大きな力があつたように思われる。<sup>(10)</sup>

Oldcastle 簿記書やそれに続く Jan Ympyn の *Notable and Excellente Woorke* (1547) がいずれも外国人の著書の翻訳にすぎなかったのに対して、英国人自身の手によって著された最初の簿記書は James Peele の *Maner and Fourme* (1553) である。<sup>(11)</sup> この Peele 簿記書においても、商品勘定は、Paciolo 簿記論の場合と同様に、例えば、デボンシャー・カーギー織りや油、フレンチ・ワインといった取扱商品の種類に応じた形で、あるいは、海外積

(10) Cf. Winjum, [39], pp. 40—45; Ramsey, [31], pp. 185—186; Yamey, [42], p. 9.

今日、英国最初の簿記書とみなされているのは、上述した如く、1543年に出版された Oldcastle の *Profitable Treatyce* であるが、しかし、これは現在のところ一冊も発見されていない幻の書であり、その内容は Oldcastle 簿記書を修正・拡大した形で出版された John Mellis の *Briefe Instruction* (1588) を介して推測されているにすぎない。Mellis 簿記書の分析を通じての Paciolo—Oldcastle—Mellis 各簿記書間の関連性その他の問題の検討については、例えば、Kats, [15], pp. 483—487; [16], pp. 641—648; Yamey *et al.*, [47], pp. 155—159; 小島, [56], 233—280頁等を参照されたい。

(11) Cf. Gordon, [12], pp. 203—204; 小島, [56], 33, 133頁。

送品についてはフランダース勘定というように特定の仕向地の名称を付した形での個別的な商品勘定、いわゆる冒険取引勘定の形態を採っていた。ただし、既述した如く、冒険取引会計の本来的な手続の下にあっては、損益は個々の商品勘定が対象としているそれぞれの取引が完結したときのみ計算されたのであるが、しかし、Peele 簿記書においては、商人の営む取引活動が、従来の断続的で当座的な性格を有する冒険取引の形態から脱皮して、次第に反復的にして継続的な性格を帯びるようになったことを反映してか、同一元帳内での他頁への勘定の繰越や元帳全体の更新に際して、売残商品の認識と原価に基づく棚卸評価の方法が説かれており、取引が未だ完結していない段階の商品勘定についても中間的な損益の把握が行われるようになっていた。<sup>(12)</sup>

Peele 簿記書を含む英国の 最初期の 複式簿記解説書はいずれも 初版どまりであったが、Richard Dafforne の *Merchants Mirrour* (1635) は出版時に多くの人気を集め、英国簿記書の中ではじめて数版を重ねるに至ったといわれる。<sup>(13)</sup> しかしながら、Dafforne の簿記書においても、藍や月桂樹、カージー織りといった商品の種類別、あるいは、リスボン向け航海勘定といった特定の仕向地別に設けられた、冒険取引勘定の形態を採る個別的な商品勘定が主として展開されていたのである。ただし、例えば、胡椒・生姜・丁字に関する小口

(12) Peele, [29], *The Instruccions, Chapitres vi & viii, and The+Quaterne, Folios 5, 6, 9*; cf. Kats, [20], pp. 88—91; [21], pp. 119—121; 小島, [56], 153—155, 197 頁。

なお、売残商品の認識とこれに伴う計算処理手続は、Paciolo 簿記論には見出されず、Peele 簿記書に先行して出版された *Notable and Excellente Woorke* の原本である Ympyn の *Nieuwe Instructie* (1543) の中ではじめて教示されたといわれる。小島男佐夫教授は、勘定整理の必要から売残商品の棚卸が行われる可能性があるがゆえに、売残商品の認識が必ずしも期間損益計算制度の確立を意味するものではないということを指摘されながらも、期間損益計算のためには棚卸商品発生 の認識とその計算処理が不可避であるという観点から、売残商品の認識を期間損益計算制度確立への前提条件の一つとして重視しておられる (小島, [56], 6—7, 117—120, 123 頁; cf. Kats, [18], pp. 292, 294; Yamey *et al.*, [47], p. 161)。

(13) Geijsbeek, [11], p. 137; Yamey *et al.*, [47], p. 167; 小島, [56], 313 頁。

取引を記帳する場合に、Dafforne は、これら三種の商品のそれぞれについて個別の商品勘定を設けることなく、食料雑貨勘定という総括的な諸商品勘定に混記して処理する方法を説いており、この種の諸商品勘定の出現は、たとえそれが少量取扱品目についての記録・計算業務簡略化のために設けられたものであったにせよ、一般商品勘定形成の萌芽を表すものと解されている<sup>(14)</sup>。しかしながら、Dafforne 簿記書に商品勘定総括化の動きが見出されるとしても、それが直ちに一般商品勘定の確立へと発展していったわけではない。18世紀における英国の代表的簿記書の一つとして評価されている Alexander Malcolm の *Treatise of Book-keeping* (1731) にあっては、毛織物取引が例に挙げられ、毛織物勘定という概括的な商品名商品勘定を設けるだけでなく、取引の状況によっては、ラシャ、ドラゲット、サージ、クレープといった毛織物の種類別に区分し、さらに、例えば、ラシャを大幅物と小幅物に、大幅物を単色物と混色物というように細区分して、その各々について個別の商品勘定を設けることも必要であると教示されていたのである<sup>(16)</sup>。

- (14) Dafforne, [6], *An Introduction to Merchants Accompts*, pp. 11, 14, 15, 21; cf. 小島, [56], 9, 325—326頁; [58], 9—10頁。

なお、簿記書において、従来からの商品種類別に設けられた個別的な商品勘定と併用するという形ではあったにせよ、二種以上の異なった商品を混在的に取り扱う諸商品勘定の利用を説いた最初の例は、英国第四番目の簿記書である John Weddington の *Brefe Instruction* (1567) に見出されるといわれ、小島教授は、この種の諸商品勘定 (“*Marchandise of diuers sortis*” Account) を一般商品勘定の萌芽形態であると考察しておられる(小島, [56], 9, 182, 184頁; [58], 6—8頁)。

- (15) 小島, [54], 54頁; cf. Yamey *et al.*, [47], pp. 172—173.

- (16) Malcolm, [27], p. 44.

なお、Malcolm の棚卸評価に関する教示について論及しておけば、16—18世紀の英国の簿記著述者が概ね原価評価を教示することにより棚卸評価の問題の解決を図っていたのに対して、彼は、売残商品を原価と時価のいずれで評価してもよいと説き、原価基準と時価基準の並行的適用を示していた。もっとも、彼自身は、時価に基づく評価は、未だ実現していないし、また、多分生じないであろう損益を勘定内に持ち込むことになるとして、売残商品を原価で評価する方がより合理的であるように思われると述べている。そして、このような Malcolm の教示は、損益の認識にかかわる実現基準の初期の適用例として評価されている (Malcolm, [27], p. 89; cf. Winjum, [39], p. 72; Yamey, [46], pp. 23—24)。

叙上のように、複式簿記知識の重要な普及媒体と考えられる簿記の解説書、特に16世紀から18世紀前半にかけての英国で出版された Peele や Dafforne, Malcolm らの簿記書からみるかぎり、商品勘定については、その後の経済発展に伴う取引活動の継続化や大規模化、複雑化等の事情を反映した売残商品の認識や棚卸評価、あるいは、諸商品勘定の利用という教示内容面での進歩は見出されるものの、基本的にはヴェネツィア式の複式簿記に既に内包されていた冒険取引勘定と総称される一群の個別的商品勘定が、彼らの説く複式簿記の勘定組織の中心を依然として形成していたのである。次節においては、この種の個別的商品勘定が、ほぼ同じ時期に活躍した英国商人によって、現実にはどのように利用されていたのかという問題について、具体的な検討を進めてゆくことにしたい。

#### IV

英国で複式簿記に基づいて記帳された現存する最古の会計帳簿は、英国に居留して商品売買業や金融業を営んでいたイタリア商人によって作成されたボロメオ商会ロンドン支店の元帳<sup>(17)</sup>（1436—1439）である。これに対して、英国商人自身の手により複式簿記が完全な形で利用された最初の例は、Oldcastle 簿記書の出版とほぼ時期を同じくする Thomas Gresham の仕訳帳（1546—1552）に見出される<sup>(18)</sup>。ただし、Gresham の帳簿以前にあって、複式簿記に完全に

(17) ボロメオ商会ロンドン支店の元帳の存在からは、少なくとも15世紀前半の英国において、外国商人によってではあるが、複式簿記が利用されていたということが示されている。しかしながら、この元帳の存在をもって、当時の英国商人の間でも既に複式簿記が利用されていたと結論することは早計であろう。小島教授は、その後の英国の簿記事情から推測するかぎり、この当時の英国商人の間では複式簿記は未だ一般には利用されていなかったとみるのが妥当であると述べておられる（小島，[56]，33頁）。

なお、ボロメオ商会ロンドン支店の元帳の研究については、Kats, [14], pp. 91—98；小島，[56]，44—61頁等を参照されたい。

(18) Winjum, [39], p. 138; Yamey, [46], p. 17.

依拠していたとは言えないものの、原則として複式記入の原理が適用されて作成されたいくつかの会計帳簿、例えば、Thomas Howell や John Johnson, John Smythe らの帳簿もまた現存している<sup>(19)</sup>。

主としてスペイン貿易に携わっていた Howell の元帳（1522—1528）に含まれている冒険取引勘定はしばしば混乱して不完全であったために、個々の商取引についての有用な口別損益に関する情報を提供することができなかったといわれる。例えば、Howell の主要な輸出品勘定であった大幅毛織物勘定においては、仕入と若干の関税が借方側に記入されていたものの、仕入後に生じた毛織物の剪毛・染色その他の加工費等は全く借記されておらず、また、相対応する貸方記入の大部分は、商品がロンドンから積送されたときに、借方側に累積された仕入原価その他の費用を別の勘定に振り替えるために行われていたにすぎない。他方、これらの積送品について借記されたセビリャ向けやダンツィヒ向け等の航海勘定においても、売上に関する貸方記入が全く行われていなかったか、あるいは、部分的に行われていたにすぎず、それゆえに、これらの勘定から個々の航海についての損益を把握することは困難であった。これに対して、<sup>(20)</sup>カレーで活躍したステーブル商人である Johnson の元帳（1534—1538）

(19) 例えば、Howell の元帳はしばしば英国商人によって記帳された現存する最古の複式簿記帳簿であるとみなされているが、しかし、彼の元帳は資本金勘定や損益勘定を欠いており、Gresham の仕訳帳にみられるような、実在・名目諸勘定が統合された形で自己完結的な体系的勘定組織は見出されない。それゆえに、複式記入の原理が原則として適用されていたとは言え、そこには多くの単式記入の例も見受けられ、完全に複式簿記に基づいて作成された会計帳簿とはみなし難い。そして、このことはまた、Johnson や Smythe の元帳についても妥当するのである（Connell-Smith, [4], p. 363; Ramsey, [31], pp. 185, 187, 196; Winjum, [39], pp. 114, 116—120; Yamey, [46], p. 16; cf. Ramsey, [31], pp. 187, 193; Vanes, [34], p. 359; Winjum, [39], pp. 120—121, 124, 128—129; Yamey, [46], pp. 16—17）。

(20) Winjum, [39], pp. 117—118, 120; cf. Connell-Smith, [4], pp. 363—370; Ramsey, [31], pp. 187, 193—194; Winjum, [39], pp. 114—115。

なお、油や白石鯨といった輸入商品について設けられた個々の商品勘定における会計処理もまた、しばしば混乱して不完全であった（Winjum, [39], p. 119）。

からは、彼が、複式簿記の技術を完全には運用することができなかったものの、冒険取引会計の手續については十分に理解していたことが示されている。すなわち、Johnson の元帳の中で展開されている冒険取引勘定は、彼が営んだ多様な取引活動を記録・計算できるように、勘定科目その他の面で工夫が施されており、個々の冒険取引勘定においては、借方側に商品の原価や関税、手数料等の費用が、貸方側に売上が記入され、損益は個々の商取引が完結した段階でそれぞれ計算されていたのである。<sup>(21)</sup>

Smythe は、主にスペインやガスコニュとの商取引活動に携わっていたブリストルの商人であり、彼の現存する元帳(1538—1550)にも多数の冒険取引勘定が見出される。例えば、毛織物やなめし革といった輸出商品が仕入れられたときには、それぞれの商品について設けられた個別の商品勘定にまず借記され、当該商品が海外に積送されたときに、アンダルシア向け航海勘定といった特定の航海勘定に振り替えられた。航海勘定の借方側には積送された商品の原価や費用のすべてが記入され、海外の代理人からの報告書が届いたとき、あるいは、すべての積送品が売却されたときに貸方記入が行われて、航海別の損益が算定された。このように、航海勘定における損益計算は原則として取引が完結したときに行われたのであるが、しかし、Smythe は、勘定の繰越に際して、売残商品の認識と原価に基づく棚卸評価を実施しており、販売未了の商品勘定においても中間的な損益の把握を行っていた。彼は、この種の航海勘定を用いることによって、商品を積送したさまざまな海外市場の相対的な収益性を比較することが可能であったように思われるが、しかし、彼の航海勘定には代理人からの報告が必ずしも記入されておらず、それゆえに、多くの航海勘定についての損益が元帳記録から算定できないという状況におかれていたのである。<sup>(22)</sup>

(21) Winjum, [39], pp. 127—130; cf. Ramsey, [31], pp. 188, 194; Winjum, [39], p. 125.

(22) Vanes, [34], pp. 359—361; Winjum, [39], pp. 121—124; cf. Vanes, [34], p. 357; Winjum, [39], p. 120.

英国商人によって記帳された現存する最古の複式簿記帳簿は、既述した如く、テューダー朝期英国の代表的な貿易・為替金融業者であった Gresham の仕訳帳である。彼の帳簿においても、冒険取引勘定は勘定組織の重要な構成要素として組み込まれていたが、そこに見出される会計処理からは、この種の勘定が損益計算の手段として積極的に利用されていたとは言い難い。例えば、アントワープへの輸出向けに英国産の大幅毛織物やカーギー織りが仕入れられると、これらの商品はまず個々の商品勘定に原価で借記された。積送が行われたとき、商品の原価は関税その他の費用とともに航海勘定の借方側に振り替えられ、同勘定貸方側には、アントワープに積送した商品の売上、あるいは、積送した商品の見返りとして現地の代理人から送られてきた商品の原価が記入された。もし Gresham の航海勘定に商品の輸出取引のみが記録されていたのであれば、アントワープ市場での積送品の売買損益を把握することも容易であったが、しかし、当該勘定には彼のもう一つの重要な活動領域である為替取引も併せて記録されており、それゆえに、航海勘定は、輸出取引についてみれば、損益計算の手段というよりも、むしろ商品の動きや代理人の活動等を管理・統制するための手段として利用されていたように思われる。<sup>(23)</sup>

なお、ワインや鉄、石鹼といった輸入商品についても個別的な商品勘定が設けられており、特にこれらの勘定への貸方記入には航海勘定のそれに対するものよりも意識的な努力が払われていたとされ、取引の完結をまって算定された口別損益は、英国内での輸入商品の販売活動を管理する上で大きな助けになったと考えられる。輸入商品勘定においても、航海勘定の場合と同様に、勘定の繰越に際しての売残商品の認識が行われていた。棚卸評価の基準としては一般に原価が用いられたが、しかし、販売可能価格、あるいは、原価と販売可能価格との中間にある任意の値が採られたこともあったといわれる (Vanes, [34], p. 361; Winjum, [39], pp. 122—123)。

- (23) Winjum, [39], pp. 132—134, 138; cf. Ramsey, [31], pp. 199—200; Winjum, [39], pp. 130—131.

アントワープの代理人から積送されてきた絹やサテン、ビロードといった輸入商品は、それぞれの商品勘定に原価で借記されるとともに、貸方側には当該商品の売上が記入された。しかし、Gresham は、この種の勘定を比較的継続した取引を記録するために用いており、したがって、各仕入口を単位とした損益の把握は行わずに、不規則的に、例えば、勘定の繰越などに際して、特定の商品勘定を貸借平均し、棚卸商

Thomas Laurence は、アントワープと英国との貿易に携わっていたマーチャント・アドヴェンチャラーである。彼の現存する第一の元帳(1565—1566)は、既述した Howell や Smythe らの元帳と同様に複式簿記帳簿としては不完全なものであり、しかも、そこに見出される冒険取引勘定の会計処理も他の商人達の実務と大きく異なっていた。すなわち、Laurence は、自己の営業活動を地域別に把握して管理するために、フランダース勘定と Thomas Laurence 勘定という二つの勘定を設け、前者の勘定には、英国内におけるアントワープ向けの毛織物などの仕入とアントワープから積送されてきた絹や粗麻布等の売上を、また、後者の勘定には、アントワープにおける英国向け商品の仕入と英国からの積送品の売上とをそれぞれ貸借記入しており、このような会計処理の結果として、当該元帳では、本来、一つの冒険取引勘定で貸借相対応されるべき同一商品の仕入と売上に関する情報が、二つの地域別勘定に交差する形で分離表示されたのである。これに対して、現存する第二の元帳(1573—1581)においては、通常の冒険取引勘定の体裁をもつアントワープ勘定が用いられるようになったが、しかし、この勘定には、商品の売買取引だけでなく、為替取引、あるいは、他の名目勘定の残高や資本金も併せて記入されていたのであり、それゆえに、Laurence が商品の仕入や売上を記録するために用いた諸勘定からは、個々の商品や航海についての収益性を把握することはきわめて困難であつた。<sup>(24)</sup>

---

品を原価で評価することにより 損益を算定していたのである (Winjum, [39], pp. 133—135)。

- (24) Winjum, [39], pp. 140—141, 144—147; cf. Ramsey, [31], pp. 188, 200; Winjum, [39], pp. 138—139.

なお、Laurence は、第二の元帳において、仕入商品をアントワープ勘定に振り替える前に、まず“wares account”と称される商品勘定に借記している。“wares”の内容については定かでないが、もし当該勘定に諸種の仕入商品が総括的に記入されていたとするならば、Laurence は、前節で言及した Weddington や Dafforne の簿記書の教示にみられるのと同様な、一般商品勘定の形成に結びつくと解される諸商品勘定を実務の中で用いていたと考えられるのである。小島教授は、Weddington 簿記

マーチャント・アドヴェンチャラズ組合や毛織物商組合の構成員であった William Calley の元帳 (1600—1606) には、彼がネーデルラントとの間で営んでいた商取引活動を記録した多くの冒険取引勘定が包含されている。例えば、輸出向けに英国内で仕入れられた毛織物はまず毛織物勘定に借記された後、海外への積送をまって、カレー向け航海勘定やダンケルク向け航海勘定といった特定の航海勘定の借方側に振り替えられた。しかし、Calley は、航海勘定への振替にあたり、他の商人達が一般に原価を用いていたのに対し、予想販売価格を用いており、しかも、振替が行われた航海勘定のあるものは、積送品とその付随費用が借記されたものの、売上についての貸方記入は全く行われずに、当該元帳の終了と更新に伴う唯一の締切日にその借方残高でもって別の航海勘定に振り替えられていたにすぎない。他方、ピロードやサテン、ファスチャン織りなどの輸入商品を取り扱った諸勘定においても、売上についての貸方記入のみが累積され、相対応すべき仕入記録は後日に一括して記入されていたり、あるいは、5年以上も前に既に取引が完結していた勘定でさえ、元帳の終了をまってようやく勘定締切の手続が施されるなどしており、このような会計処理からは、彼の元帳に包含された冒険取引勘定が損益計算の手段として積極的<sup>(25)</sup>に評価されていたとは考えられないのである。

William Hoskins は、17世紀半ば頃にシェルブールに居住していた英国商人である。彼の元帳 (1655—1667) に含まれた冒険取引勘定は、それが当座的な商取引活動を表すものであった場合には、それぞれの勘定における商品の最終的な売却をまって直ちに損益が算定された。しかし、長期にわたり比較的継

---

書、あるいは、これと同じ1567年に同じアントワープで出版された Pierre Savonne の簿記書が、いずれも一般商品勘定形成の動きを示していたことから、この時期のネーデルラント、特に取引の中心地であったアントワープの商人達の間で、諸種の商品を総括的に勘定処理しようとする試みが既に行われはじめていたと考察しておられる (Cf. Winjum, [39], p. 145; Ramsey, [31], p. 192; 小島, [58], 7—8頁)。

(25) Winjum, [39], pp. 148—152, 154—155; cf. [39], p. 147; Yamey, [46], p. 21.

続した形で営まれたシェルブール帆布の取引を記録した勘定の場合には、商品の仕入口を単位とする個別的な損益の把握は行われずに、取引量が多いときには6～9ヶ月、取引量が少ないときにはもっと長い期間を単位として当該勘定の締切と損益の計算が行われていた。<sup>(26)</sup>これに対して、17世紀英国の最も富裕な商人の一人であったといわれる John Banks の三冊の元帳(1657—1699)においては、一般に、通常の冒険取引会計の手続が適用されており、個々の商取引の完結をまって損益が算定され、未完結の商取引を表す勘定では、元帳全体の更新に際しても、商品の部分的販売から生じた損益の中間的把握は行われることなく、各勘定の算術的な貸借差額が新しい元帳に繰り越されていたにすぎない。<sup>(27)</sup>

Robert Clayton と John Morris との非常に密接な個人的結びつきの上に築かれた組合企業に関しては、四冊の元帳(1669—1680)を含む多数の文書記録が残存している。彼らの組合企業において営まれた事業は、今日の金融業者、不動産管理人、事務弁護士等の業務を包含する多様な活動に及んでいるが、しかし、冒険取引勘定の利用は、彼らが他者との共同事業に携わった場合に限られていた。Clayton and Morris の元帳を既述した Howell や Gresham, Banks らの帳簿と比較するとき、我々は、彼らの元帳が毎年一定の期日に全般的な貸借平均と締切の手続を施されていたという点に大きな特徴を見出すことができる。しかしながら、冒険取引勘定については、他の諸勘定の規則

(26) Yamey *et al.*, [47], p. 196; Winjum, [39], pp. 161—163; cf. Yamey *et al.*, [47], pp. 181, 187; Winjum, [39], pp. 160, 164—165.

ただし、シェルブール帆布の仕入記録は、取引の進行に即して記帳されておらず、一般には、不規則的に実施された帆布勘定の締切に際して借記されていたにすぎない。それゆえに、当該勘定の内容を適時性あるものとするための努力は十分に払われていなかったのである。なお、帆布勘定の締切にあたって、在庫品は原価で繰り越されていたといわれる (Winjum, [39], p. 163)。

(27) Yamey *et al.*, [47], p. 196; Winjum, [39], pp. 170—171, 173; cf. Coleman, [2], p. 225; [3], pp. 202—205; Yamey *et al.*, [47], pp. 181, 187; Winjum, [39], pp. 166—167, 171.

的な締切とは無関係に、専ら当事者の都合や特別の要求に従い、比較的稀に不規則的な間隔での締切が行われて、算定された損益が各当事者の勘定に振り替えられていたにすぎない。それゆえに、Clayton and Morris にみられる元帳の年次締切も、一年間に稼得された利益を適切に把握しようとする期間損益計算的見地から積極的に動機づけられていたとは必ずしも言い難いのである。<sup>(28)</sup>

若い頃からレヴァント貿易に従事していた Dudley North の元帳(1680—1691)には、彼が晩年においてもなお海外との商取引活動に携わっていたことを示す多数の冒険取引勘定が包含されている。彼は、これらの勘定に記録される取引がスミルナやアントワープ、ジャマイカ等との当座的航海を内容とするものであったときには、通常の冒険取引会計の手續を適用して、個々の取引にかかわるすべての商品が売却されたという情報の入手をまって損益を算定していた。他方、それがコンスタンティノーブル、カディス、リスボンといった特定の地域との間で営まれた継続的な取引であったときには、当座的取引の場合とは異なった会計処理の方法を用いた。すなわち、コンスタンティノーブル向け航海勘定についてみれば、そこには多数の航海に関する記録が記載され、損益は、個々の航海を単位とする形ではなく、当該勘定の他頁への繰越に際して品目別に把握されていたのである。しかしながら、North がこの勘定を必ずしも損益計算の手段として評価していたとは思えず、例えば、彼の最大の輸出品である毛織物は、積送先の代理人等の販売責任を明らかにするために、原価を上回る市価近似値で当該勘定に振り替えられており、したがって、航海勘定に記載された記録からだけでは積送した毛織物の売買損益を把握することはできず、他の補足的な記録に依拠して損益が計算されていたといわれる。<sup>(29)</sup>

(28) Winjum, [39], pp. 179—181, 183; cf. Coleman, [2], pp. 221—230; Yamey *et al.*, [47], pp. 182, 187; Winjum, [39], pp. 175—176.

(29) Winjum, [39], pp. 187—190; cf. Letwin, [24], p. 36; Yamey *et al.*, [47], pp. 184, 188; Winjum, [39], pp. 185—186, 192—193.

なお、North は、鉛や錫といった毛織物以外の商品を航海勘定に振り替えるとき

冒険取引勘定に記録される商取引が、当座的な性格のものか、あるいは、継続的な性格を帯びたものかによって異なった会計処理方法を選択的に適用するという、Hoskins や North の元帳に見受けられた実務は、17世紀末から18世紀はじめの英国の非常に成功した商人であった Charles Peers の仕訳帳（1689—1695）の中にもその例が見出される。すなわち、彼によって営まれた唯一の継続的な取引活動であるマラガの組合企業への輸出を記録した勘定においては、不規則的な間隔で勘定締切の手續が施され、そこで算出された損益には多数の航海の成果が包含されていたといわれる。これに対して、当座的な商取引を記録対象とした冒険取引勘定では、個々の取引の完結をまって損益が算定されたのみであり、帳簿の全般的な貸借平均と締切が行われたただ一度の機会である帳簿更新のときでさえ、未完結の商取引にかかわる勘定はその時点での貸借差額でもって繰り越されていたにすぎない。<sup>(30)</sup>

18世紀の英国における富裕なジェントリーであった Peter Du Cane の元帳（1735—1745）にみられる大きな特徴は、会計期間の概念が厳密に守られた形での元帳の規則的な締切が行われていたという点にある。すなわち、彼の元帳に包含された名目諸勘定の残高は年に一度12月31日に、あるいは、年に二度6月30日と12月31日にそれぞれ損益勘定に振り替えられ、また、損益勘定の残高も12月31日に資本金勘定への振替が行われて、残高勘定の作成を伴った形での元帳の規則的な年次締切の手續が実施されていた。このような年次締切の実務は、彼の1750年代の元帳にも見出されるのであるが、しかし、それは、既述した Clayton and Morris の場合と同様に、必ずしも各会計年度に帰属すべ

---

には、他の商人達の一般的な実務と同様に、個々の商品勘定に累積された原価を用いており、また、絹靴下はいったんカディス向け航海勘定に時価で振り替えられていたものの、毛織物の場合と異なって、原価基準に引き戻すための修正記入が施されていた（Winjum, [39], pp. 187, 189）。

- (30) Yamey *et al.*, [47], pp. 187—188, 197; Winjum, [39], pp. 197—199, 202—203; cf. Yamey *et al.*, [47], p. 184; Winjum, [39], pp. 194—195.

き損益を適切に把握しようとする期間損益計算の見地から積極的に動機づけられていたとは思えない。例えば、彼の元帳に含まれていた冒険取引勘定については、いかなる損益も取引が完結するまではこれらの勘定において認識されることなく、未完結の取引を表す勘定では各締切日にその算術的な貸借差額が繰り越されていたにすぎず、損益はそれぞれの取引が完結した年度の損益勘定に一括して振り替えられていたのである。<sup>(31)</sup>

これまで論及してきたのは、いずれも個人企業ないし個人的色彩の強い組合企業の会計帳簿であった。ここでは、最後に、当時における代表的な独占的巨大大貿易企業であった英国東インド会社——正確にはロンドン東インド会社——の四冊の元帳(1664—1675)について概観してみよう。これらの元帳は、Oliver Cromwell と Charles II による改組を経て、東インド会社が従来の当座的な性格を払拭し、近代的株式会社企業の起源とみなされうる段階に到達した時期に作成されたものであるが、しかし、そこに包含されていた商品勘定は、既述した Howell や Gresham, North らの帳簿にみられるのと同様に、取扱商品の種類や特定の仕向地に対する航海などを単位とした冒険取引勘定の形態を採っており、当時の大規模企業の一つであった東インド会社の会計実務においてさえ、一般商品勘定の利用は未だ見出されない。例えば、東インド地域への輸出のために購入された大幅毛織物、銀、硫黄その他の商品は、それぞれの商品勘定にまず借記された後、船積みをもってスラト向け航海勘定といった特定

(31) Winjum, [39], pp. 209—212; cf. Yamey *et al.*, [47], pp. 185, 187; Winjum, [39], p. 204.

なお、Peter の父親である Richard Du Cane の元帳(1736—1744)も現存しているが、しかし、当該元帳は、彼が実業界から引退した晩年のものであり、商品勘定については、紅色染料であるコチニールを取り扱った勘定がわずかに一つだけ見出されるのみである。このコチニール勘定は、元帳の全般的な締切日にも、単純に貸借差額が繰り越されていたにすぎず、当該勘定に生じた損失は、彼の死後、Peter が父親の元帳を引き継ぎ、最終的にこれを締め切るときまで計算されなかったといわれる(Yamey *et al.*, [47], p. 197; Winjum, [39], p. 206; cf. Yamey *et al.*, [47], pp. 185, 187; Winjum, [39], pp. 204—205, 207—208)。

の航海勘定に原価で振り替えられ、さらに、船舶が目的地に到着したとき、現地の代理人の勘定に原価で借記されていた。他方、東インド地域から積送されてきた胡椒や硝石などがロンドンで受け取られたときには、これらの輸入商品について個別の商品勘定が設けられ、現地の代理人によって取得された当該商品の原価に加えて関税その他の費用が借記されるとともに、貸方側には売上が記入された。取引が完結した段階でのこの種の勘定の貸借差額は自ずと個々の輸入商品の売買損益を表していたはずであるが、しかし、当時の東インド会社の会計実務にあっては、各元帳が終了するときまでこれらの勘定における損益の算定は延期されており、元帳内での適時性ある口別損益の把握に対する関心は低かった。このように、東インド会社の元帳にみられる商品勘定の形態やその利用状況も、既述した英国商人の帳簿に見出されるものと大きな差がなく、この種の勘定は、損益計算の手段として積極的に利用されていたとは言えず、むしろ商品の動きや海外の代理人の活動等を統制するという管理計算の側面<sup>(32)</sup>で主として評価されていたように思われるのである。

## V

本稿の課題は、16世紀から18世紀前半にかけての英国商人の会計帳簿に見出される冒険取引勘定が果たしていた実際的な役割を検討することによって、複式簿記が当時の英国の会計実務の中でどのように利用されていたのか、特にその損益計算機能がどのように評価されていたのかという問題について考察することにあった。企業会計の基本的計算形式たる複式簿記の生成過程について

(32) Winjum, [39], pp. 223—224; cf. 大塚, [50], 489—509頁; Winjum, [39], pp. 214—221.

なお、元帳の終了と更新に伴う締切にあたっては、未だ商品の販売が完了していない勘定においても中間的な損益の把握が行われていたといわれる (Winjum, [39], pp. 224, 226)。

は、従来からさまざまな仮説が提起されているものの、史料制約条件などもあって、その誕生の時期と場所に関して明確に一致した見解を見出すことは困難である。しかしながら、遅くとも13世紀後半から14世紀前半にかけての時期に、地中海商業によって繁栄したイタリア商人の間で複式簿記が利用されていたということは明らかなようであり、このような基本的構造が一応確立された段階での複式簿記を説述した世界最初の印刷文献が Pacioolo の簿記論であった。しかし、これは、あくまでも地中海商業復活後の仲継海上貿易を機軸に繁栄したヴェネツィアで用いられていた複式簿記を説いたもので、したがって、今日の複式簿記解説書と種々な点で相違する内容を包含したものであり、例えば、そこに見出される損益計算は、期間計算の形態ではなく、原初的な口別計算の形態を採っていた。近代的な期間損益計算制度に先行する口別損益計算制度の下にあっては、定期決算と結びついた形での元帳の規則的な締切はみられず、元帳の締切手続は、帳簿の更新、あるいは、商人の死亡や廃業などに際して、主として簿記処理上の見地から、特定の期間的制約を受けることなく、いわば必要なときに随時行われていたにすぎない。しかし、定期決算制度と結びついた形での元帳の規則的な締切に基づく、企業全体としての期間損益の限定計算が行われていなかったとしても、このことが、直ちに、当時の商人達が元帳記録からの損益の把握に無関心であったということを意味するわけではない。Pacioolo 簿記論に示されるように、当時のヴェネツィア式簿記の勘定組織においては、商人の営業活動が基本的には断続的で当座的な性格を有する冒険取引の集合から成り立っていたことを反映してか、取扱商品の種類や仕入口別、あるいは、特定の仕向地に対する航海や旅商別といった、個々の商取引活動を単位とした複数の商品勘定、つまり、冒険取引勘定が設けられていた。当時の商人達は、このような一群の個別的商品勘定を基礎とした冒険取引会計の手続を用いることによって、商品の仕入や売上のみならず、諸費用もできるだけ特定の商取引に関連づけて把握し、期間とは無関係に、それぞれの商取引にかかわ

る商品のすべてが売却され、取引が最終的に完結した段階で、その都度、該当する商品勘定のみを締め切って、特定の商取引に帰属すべき損益、つまり、口別損益を計算することができた。そして、このような元帳の不規則的な締切と冒険取引会計の手続を内包したヴェネツィア式の複式簿記こそが、本稿の考察対象である英国に導入され、かつ、利用されるようになった複式簿記の原型をなしたのである。

Paciolo 簿記論に代表されるような、基本的構造において一応の確立をみた複式簿記が、いつ、どのように英国に伝播してきたのかについては定かでない。英国で複式簿記に基づいて記帳された現存する最古の会計帳簿はボロメオ商会ロンドン支店の元帳であるが、しかし、これは15世紀前半の英国に居留していたイタリア商人によって作成されたものであり、英国商人自身の手になるものは、現在のところ16世紀半ばに作成された Gresham の仕訳帳が最初であるとみなされている。本稿では、限られた範囲であるが、この Gresham を含む16世紀から18世紀前半にかけての英国商人の会計帳簿にみられる損益計算の状況について検討を試みた。期間損益計算制度の下での定期決算と結合した元帳の規則的な締切は、本稿で取り上げた英国商人の帳簿のいずれにおいても見出されず、元帳の締切は、概ね、全く行われていなかったか、帳簿更新のときにのみ行われていたか、あるいは、せいぜい不規則的な間隔で実施されていたにすぎない。<sup>(33)</sup> また、元帳に年次締切の手続が施されていた数少ない例である Clayton and Morris や Du Cane の場合にも、それは、既述した如く、一

(33) Cf. Winjum, [39], Chapters VIII—IX, *passim*; Yamey *et al.*, [47], pp. 187—188; Yamey, [46], p. 21.

なお、東インド会社では帳簿を毎年貸借平均すべき旨の規則が定められたこともあったが、しかし、現実に元帳諸勘定に年次締切の手続がはじめて施されたのは18世紀も後半に入った合同東インド会社の元帳 K (1756—1763) においてであり、本稿で取り上げた四冊の元帳が及んでいる時期を含めた初期の東インド会社の会計実務の中では、元帳の規則的な締切はみられず、締切手続が施されたのは各元帳の終了に際してのみであったといわれる (茂木, [61], 348, 353—355頁; cf. Winjum, [39], pp. 221—223, 231)。

年間に稼得された利益を適切に把握しようとする期間計算的見地に基づいて実施されていたと言ひ難いのである。しかしながら、定期決算と結合した形での元帳の規則的な締切に基づく、企業全体としての期間損益の限定計算が行われていなかったとしても、それが、直ちに、本稿で取り上げた英国商人が複式簿記に基づく帳簿記録からの損益の把握に無関心であったという結論を意味するものでないことは明らかであろう。すなわち、もし彼らの帳簿に冒険取引勘定と総称される個別的な商品勘定や航海勘定などが設けられ、これらの勘定を基礎として運用される冒険取引会計の手続が適用されていたとするならば、彼らは、期間とは無関係に、個々の商取引に関連づけて損益を把握することが可能であったはずであるし、事実、本稿で検討を加えた Gresham をはじめとする英国商人の会計帳簿には、いずれも冒険取引勘定が勘定組織の重要な構成要素として組み込まれていたのである。彼らは、これらの冒険取引勘定から損益を把握するにあたり、特定の勘定が対象とする取引の完結をまって損益を算定するという、冒険取引会計本来の手続をそのまま適用していた場合もあれば、同一元帳内での他頁への勘定の繰越や元帳全体の更新その他の際に不規則的に勘定を締め切り、売残商品の認識と棚卸評価を行って、取引が完結する以前においても中間的な損益を把握するという、取引活動の反復化や継続化等に対応した、修正された形態での冒険取引会計の手続を適用していた場合もあり、さら

- (34) 当座的な海上商業に従事する商人を本来の対象とした冒険取引会計の手続は、非常に弾力的な性格を有していたために、商人の営む取引活動が次第に反復的で継続的なものになってゆくにつれて、売残商品の認識と棚卸評価を内包した形態へと修正・拡大され、さらに、商品の売買取引のみならず、固定資産の会計処理にも応用されるようになった。すなわち、Yamey によれば、17—18世紀の英国の簿記書においては、固定資産の会計処理について三つの異なった方法が教示されていたといわれる。第一の方法は、固定資産が原初原価のままで繰り越されるというもの、第二の方法は、固定資産の原初原価に、その後の支出を加えたものから、当該資産にかかわる収入（資産の一部の売却に伴う収入を含む）を控除した算術的な貸借差額が繰り越されてゆくというもの、そして、第三の方法は、固定資産に再評価の手続が施され、再評価後の新しい価額が繰り越されるというものであった。このうち、第二の方法は、言うまでもなく、商品の売買取引に適用されていた冒険取引会計的手続の固定資産処理への応

に、勘定に記録される取引の性格に応じて両者を同一の帳簿内で並行的に適用していた場合も見出されるのである。反面、この種の勘定が、本稿で取り上げた英国商人によって、損益計算の手段として積極的に評価され、かつ、利用されていたとは思えない多くの事例もみられる。例えば、仕入記録が借記されていたにもかかわらず、売上についての貸方記入が全く行われていなかったり、売上記録のみが貸方側に累積されて、仕入に関する借方記入は後日に一括して行われていたり、あるいは、取引が既に完結していたにもかかわらず、元帳が終了するときまで該当する勘定における損益の算定が延期されていたりしており、このような会計処理からは、冒険取引勘定における口別損益の把握が全くできなかったか、少なくとも適時性ある口別損益の情報は入手することができなかった。また、本来、特定の冒険取引勘定で貸借相対応されるべき同一商品の仕入と売上に関する情報が分離表示されていたり、一つの冒険取引勘定に商品の売買取引の記録のみならず、為替取引、場合によっては、他の名目勘定の残高や資本金までもが混記されていたり、あるいは、勘定間での商品の振替にあたり時価が用いられるなどしていたために、個々の勘定における商品の売買損益の把握が事実上困難に陥っていた事例も数多く見出されることを考え併せるならば、本稿で取り上げた16—18世紀の英国商人の会計帳簿に包含された冒険取引勘定は、損益計算の手段としてよりも、むしろそこに記載された商品の源泉、数量、所在、所有関係等についての詳細な情報のゆえに評価され、商品の動きや代理人の活動などを統制し、彼らが営んだ取引活動を個別的に管理するための手段として主に利用されていたものと考えられるのである。<sup>(35)</sup>

既述したように、Yamey は、複式簿記が有する主要な特長を次の三点に要約していた。すなわち、(1)記録が包括的で秩序だっていること、(2)記帳の二重

用であり、これは、本稿で取り上げた英国商人の会計帳簿、例えば、North や Du Cane の元帳においても見出されるのである (Yamey *et al.*, [47], p. 197; Yamey, [46], p. 23; Winjum, [39], pp. 190, 210; cf. Malcolm, [27], p. 90)。

(35) Cf. Yamey, [41], p. 112; [46], p. 19; Chatfield, [1], p. 60.

性にに基づく自己検証能力を備えていること、(3)企業の損益および財政状態に関する報告書を誘導しうる資料を包含しているといふことの三点であった。今日、複式簿記が企業会計の基本的計算形式として利用されるにあたり、最も評価されているのは、言うまでもなく第三の特長、つまり、企業の損益や財政状態に関する情報を、実地棚卸に全面的に依拠することなく、元帳に蓄積された記録から原則として取り出すことができるという点であるが、しかし、この特長、殊にそこに包摂されている損益計算の機能は、期間計算のみならず、冒険取引勘定の利用を介しての口別計算の側面においてさえ、これまで記述してきたことから明らかなように、本稿で取り上げた16—18世紀の英国商人の会計帳簿からみれば、当時の商人達によってそれが積極的に評価されていたという結論は得ることができなかった。同時にまた、財政状態についての報告書である貸借対照表の基礎となる残高勘定も、本稿で検討を加えた会計帳簿にあっては、多くの場合に、全く見出されなかったか、帳簿の終了に際して作成されていたにすぎず、<sup>(36)</sup>したがって、第三の特長を構成する損益や財政状態に関する情報提供機能が積極的に評価されたがゆえに、複式簿記が当時の会計実務の中で利用されていたとは思えないのである。また、Yamey が挙げた第二の特長である複式簿記の自己検証能力を通じての簿記上の誤謬の発見と訂正も、これらの商人達の主たる関心事でなかったことを考え併せるならば、<sup>(37)</sup>本稿で取り上げた16—18世紀の英国商人が複式簿記を利用した最大の要因は、残る第一の特長、つまり、複式簿記に基づいて記帳された帳簿記録が包括的で秩序だっ

(36) Cf. Winjum, [39], Chapters VIII—X, *passim*; Yamey *et al.*, [47], pp. 192—193; Yamey, [46], p. 20.

(37) 複式簿記を完全な形で運用していなかった Howell や Smythe らが自己検証能力を利用できなかったということは言うまでもないが、しかし、複式簿記を完全に運用していた商人達でさえ、自己検証能力、および、この能力を通じての記録・計算上の誤謬の発見と訂正に大きな関心を払っていたとは思えない事例がみられる。例えば、Hoskins や Banks, Peers の帳簿においては、貸借の不一致が発見されたとき、資本金勘定や損益勘定などに対して帳尻を合わせるための単式記入を施すことによって、貸借の均衡が便宜的に回復されていたのである (Yamey *et al.*, [47], p. 189)。

いたという点に存するものと考えられる。<sup>(38)</sup>すなわち、彼らが自己の計算や他者との共同の計算その他の形態で携わっていたさまざまな取引活動、および、そこから生じる顧客や仕入先、代理人、あるいは、組合企業の他の構成員などとの債権・債務関係等についての包括的で秩序だった記録を保持することによって、これらを管理・統制することに主たる関心が向けられていたのであり、経営活動の管理的把握こそが、彼らの会計実務の中で複式簿記が果たしていた主要な役割であった。損益計算の機能は、当時の商人達の会計実務にあっては、包括的で秩序だった取引記録の作成機能に対して副次的なものにとどまっており、損益計算は、極言すれば、個々の冒險取引勘定や元帳全体の締切に伴う副産物にすぎなかったとも言えるであろう。<sup>(39)</sup>しかしながら、包括的で秩序だった取引記録作成の要求は、単式簿記のような余り複雑でない方法によってもある程度まで満たされるものであり、複式簿記が他の会計記録技術に比較して有すると評価されている最大の特長、つまり、損益や財政状態についての情報提供機能を当時の英国商人に認識させる程の高度な要求ではなかった。そして、このような真価が未だ十分に認識されない段階での複式簿記の利用は、それが相対的に複雑な勘定組織を備えた精緻な簿記法であったがゆえに、却って当時の商人達の間に、そこから得られる成果以上に記録・計算業務が煩雑で労を要するものであり、彼らが営んでいた取引の規模や性質等の実情にそぐわないとの意識を醸成したように思われる。<sup>(40)</sup>おそらく、複式簿記は、16世紀から18世紀前半にかけての英国では、本稿で取り上げた Gresham や Banks, North など

(38) Cf. Yamey, [40], p. 342; [42], p. 3.

(39) Cf. Yamey, [41], p. 112; Yamey *et al.*, [47], p. 187; Winjum, [36], p. 755; [39], p. 157; Chatfield, [1], p. 59.

(40) 例えば、Jean Vanes は、当時の商人達が複式簿記を十分に利用していなかったとするならば、それは、彼らが複式簿記を習得する機会を欠いていたためでなく、彼らの取引の規模や性質からみて、複式簿記に基づく記帳が、労多くして多忙であるばかりでなく、おそらくは、不必要で経済的に引き合わないものであったからであると述べている (Vanes, [34], p. 357)。

のような大商人、あるいは、東インド会社といった一部の企業においては利用されていたであろうが、しかし、それが広く一般に利用されていたとは思えず、むしろ大多数の企業はより簡便な会計記録技術である単式簿記を用いていたように思われる。<sup>(41)</sup> 英国における複式簿記の広汎な普及は19世紀、それも後半のことであろうと説く Yamey の主張が正しいものとするならば、産業革命も<sup>(42)</sup> 経過したこの時期に至って、ようやく複式簿記のもつ優れた能力が本格的に認識され、かつ、それが必要とされるような経済環境が英国において成熟したものと考えられる。産業革命期から19世紀後半にかけての英国の簿記事情については今後の研究課題として、本稿をひとまず閉じることにした。

(July 31, 1981)

(41) Cf. Yamey, [41], p. 105.

(42) Yamey, [46], p. 17; cf. Chatfield, [1], p. 61.

なお、Yamey は、複式簿記の主たる普及要因として、(i) 株式会社企業の増大、(ii) 所得課税、(iii) 会計専門職業人による利用とその影響という三点を挙げ、特に (iii) の要因を重視している (Yamey, [42], p. 11; cf. [40], p. 342; [41], p. 113; [46], p. 17)。

## 主要參考文獻

- [1] Chatfield, M., *A History of Accounting Thought*, revised ed., Huntington, New York, 1977.
- [2] Coleman, D. C., "London Scriveners and the Estate Market in the Later Seventeenth Century," *The Economic History Review*, 2nd Series, Vol. IV, No. 2 (1951), pp. 221-230.
- [3] ———, "The Accounts of Sir John Banks," reprinted in B. S. Yamey, ed., *The Historical Development of Accounting*, New York, 1978, pp. 202-205.
- [4] Connell-Smith, G., "The Ledger of Thomas Howell," *The Economic History Review*, 2nd Series, Vol. III, No. 3 (1951), pp. 363-370.
- [5] Coomber, R. R., "Pioneers in English Book-keeping Texts—Hugh Oldcastle and John Mellis," *Accounting Research*, Vol. VII, No. 2 (April 1956), pp. 201-216.
- [6] Dafforne, R., *The Merchants Mirrour: or, directions for the perfect ordering and keeping of his accounts; .....* (London, 1635), reprinted ed., London, 1978.
- [7] de Roover, F. E., "The Business Records of an Early Genoese Notary, 1190-1192," *Bulletin of the Business Historical Society*, Vol. XIV, No. 3 (June 1940), pp. 41-46.
- [8] ———, "Partnership Accounts in Twelfth Century Genoa," *Bulletin of the Business Historical Society*, Vol. XV, No. 6 (December 1941), pp. 87-92.
- [9] de Roover, R., "New Perspectives on the History of Accounting," *The Accounting Review*, Vol. XXX, No. 3 (July 1955), pp. 405-420.
- [10] ———, "The Development of Accounting prior to Luca Pacioli according to the Account-books of Medieval Merchants," in A. C. Littleton and B. S. Yamey, eds., *Studies in the History of Accounting*, London, 1956, pp. 114-174.
- [11] Geijsbeek, J. B., *Ancient Double-Entry Bookkeeping*, Denver, Colorado, 1914.
- [12] Gordon, C., "The First English Books on Book-keeping," in A. C. Littleton and B. S. Yamey, eds., *Studies in the History of Accounting*, London, 1956, pp. 202-205.

- [13] Hatfield, H. R., "An Historical Defense of Bookkeeping," *The Journal of Accountancy*, Vol. XXXVII, No. 4 (April 1924), pp. 241-253.
- [14] Kats, P., "Double-Entry Book-Keeping in England before Hugh Oldcastle," *The Accountant*, Vol. LXXIV, No. 2667 (16 January 1926), pp. 91-98.
- [15] ———, "Hugh Oldcastle and John Mellis—I," *The Accountant*, Vol. LXXIV, No. 2677 (27 March 1926), pp. 483-487.
- [16] ———, "Hugh Oldcastle and John Mellis—II," *The Accountant*, Vol. LXXIV, No. 2682 (1 May 1926), pp. 641-648.
- [17] ———, "The 'Nouvelle Instruction' of Jehan Ympyn Christophle—I," *The Accountant*, Vol. LXXVII, No. 2750 (20 August 1927), pp. 261-269.
- [18] ———, "The 'Nouvelle Instruction' of Jehan Ympyn Christophle—II," *The Accountant*, Vol. LXXVII, No. 2751 (27 August 1927), pp. 287-296.
- [19] ———, "James Peele's 'Maner and Fourme'," *The Accountant*, Vol. LXXXII, No. 2875 (11 January 1930), pp. 41-44.
- [20] ———, "James Peele's 'Maner and Fourme'," *The Accountant*, Vol. LXXXII, No. 2876 (18 January 1930), pp. 88-91.
- [21] ———, "James Peele's 'Maner and Fourme'," *The Accountant*, Vol. LXXXII, No. 2877 (25 January 1930), pp. 119-122.
- [22] Lane, F. C., "Venture Accounting in Medieval Business Management," *Bulletin of the Business Historical Society*, Vol. XIX, No. 5 (November 1945), pp. 164-173.
- [23] Lee, G. A., "The Concept of Profit in British Accounting, 1760-1900," *Business History Review*, Vol. XLIX, No. 1 (Spring 1975), pp. 6-36.
- [24] Letwin, W., "The Authorship of Sir Dudley North's *Discourses on Trade*," *Economica*, New Series, Vol. XVIII, No. 69 (February 1951), pp. 35-56.
- [25] Littleton, A. C., *Accounting Evolution to 1900*, New York, 1933.
- [26] Littleton, A. C. and Zimmerman, V. K., *Accounting Theory: Continuity and Change*, Englewood Cliffs, New Jersey, 1962.
- [27] Malcolm, A., *A Treatise of book-keeping, or, merchants accounts; in the Italian method of debtor and creditor* (London, 1731), reprinted ed., London, 1979.
- [28] Martinelli, A., "Business Ventures in Genoa during the Twelfth Century (1156-1158)," *The Accounting Historians Journal*, Vol. IV, No. 1 (Spring 1977), pp. 55-68.

- [29] Peele, J., *The Maner and fourme how to kepe a perfecte reconyng, after the order of the moste worthie and notable acoompte, of debitour and creditour* ..... (London, 1553), reprinted ed., London, 1978.
- [30] Penndorf, B., *Luca Pacioli: Abhandlung über die Buchhaltung 1494*, Stuttgart, 1933.
- [31] Ramsey, P., "Some Tudor Merchants' Accounts," in A. C. Littleton and B. S. Yamey, eds., *Studies in the History of Accounting*, London, 1956, pp. 185-201.
- [32] Sutherland, P., "Hugh Oldcastle and the 'Profitable Treatyce' of 1543," *The Accountant*, Vol. CII, No. 3407 (23 March 1940), pp. 334-336.
- [33] Thomson, H. W., "The Institute's Library Treasures: How the 'Method of Venice' Came to England," *The Accountant*, Vol. CXLIII, No. 4478 (October 15th, 1960), pp. 469-472.
- [34] Vanes, J., "Sixteenth-century Accounting: The Ledger of John Smythe, Merchant of Bristol," *The Accountant*, Vol. CLVII, No. 4839 (September 16th, 1967), pp. 357-361.
- [35] Winjum, J. O., *The Role of Accounting in the Economic Development of England: 1500 to 1750*, Ph. D. dissertation (University of Illinois), 1970.
- [36] ———, "Accounting in its Age of Stagnation," *The Accounting Review*, Vol. XLV, No. 4 (October 1970), pp. 743-761.
- [37] ———, "The Journal of Thomas Gresham," *The Accounting Review*, Vol. XLVI, No. 1 (January 1971), pp. 149-155.
- [38] ———, "Accounting and the Rise of Capitalism: An Accountant's View," *Journal of Accounting Research*, Vol. IX, No. 2 (Autumn 1971), pp. 333-350.
- [39] ———, *The Role of Accounting in the Economic Development of England: 1500-1750*, Urbana, Illinois, 1972.
- [40] Yamey, B. S., "The Functional Development of Double-Entry Bookkeeping," *The Accountant*, Vol. CIII, No. 3439 (2 November 1940), pp. 333-342.
- [41] ———, "Scientific Bookkeeping and the Rise of Capitalism," *The Economic History Review*, 2nd Series, Vol. I, Nos. 2 & 3 (1949), pp. 99-113.
- [42] ———, "Introduction," in A. C. Littleton and B. S. Yamey, eds., *Studies in the History of Accounting*, London, 1956, pp. 1-13.

- [43] ———, “Some Seventeenth and Eighteenth Century Double-Entry Ledgers,” *The Accounting Review*, Vol. XXXIV, No. 4 (October 1959), pp. 534-546.
- [44] ———, “A Seventeenth Century Double-Entry Journal,” *Accountancy*, Vol. LXXI, No. 807 (November 1960), pp. 639-641.
- [45] ———, “Accounting and the Rise of Capitalism: Further Notes on a Theme by Sombart,” *Journal of Accounting Research*, Vol. II, No. 2 (Autumn 1964), pp. 117-136.
- [46] ———, “Some Topics in the History of Financial Accounting in England, 1500-1900,” in W. T. Baxter and S. Davidson, eds., *Studies in Accounting*, London, 1977, pp. 11-34.
- [47] Yamey, B. S., Edey, H. C. and Thomson, H. W., *Accounting in England and Scotland: 1543-1800*, London, 1963.
- [48] 泉谷勝美, 『中世イタリア簿記史論』, 森山書店, 1964.
- [49] ———, 『複式簿記生成史論』, 森山書店, 1980.
- [50] 大塚久雄, 『株式会社発生史論』(大塚久雄著作集第一巻), 岩波書店, 1969.
- [51] 小島男佐夫, 「決算と元帳の締切について——複式簿記発生史に関する一考察として——」, 会計, 第79巻第3号(1961年3月), 44—58頁。
- [52] ———, 「17～8世紀英国の簿記事情」, 商学論究, 第35号(1961年9月), 1—23頁。
- [53] ———, 「17世紀英国商人の仕訳帳」, 商学論究, 第36号(1961年12月), 213—225頁。
- [54] ———, 『簿記史論考』, 森山書店, 1964.
- [55] ———, 『複式簿記発生史の研究(改訂版)』, 森山書店, 1965.
- [56] ———, 『英国簿記発達史』, 森山書店, 1971.
- [57] ———, 『簿記史』, 森山書店, 1973.
- [58] ———, 「商品勘定の総括化と分割」, 商学論究, 第20巻第1号(1973年3月), 1—24頁。
- [59] ———, 『会計史資料研究』, 大学堂書店, 1978.
- [60] 茂木虎雄, 『近代会計成立史論』, 未来社, 1969.
- [61] ———, 「イギリス東インド会社の会計帳簿」, 立教経済学研究, 第28巻第3・4合併号(1974年12月), 333—359頁。
- [62] ———, 「十七・八世紀イギリス会計史の研究」, 立教経済学研究, 第29巻第3号(1975年12月), 83—120頁。
- [63] 山下勝治, 『損益計算論』, 泉文堂, 1950.